

第3学年1組 道徳科学習指導案

場所 3年1組教室 指導者 山平 恵太

1 教材名 いじりといじめ（C公正、公平、社会正義）

本学級は、明るく元気な子どもが多く、授業ではクラスメイトの話を真剣に聞き、よくないと思う出来事があれば注意することもできる。一方、ギャングエイジ期の特徴として自分の仲間を優先することがあり、自分と仲のよい相手を優遇し、自分と仲のよくない相手には不公平な態度で接してしまうこともある。これは不公平な態度が周囲に与える影響を、集団の中の自分という視点で考えることができていないことに要因があると考える。このような子どもたちが、いじりといじめの違いの間にあるグラデーションを知り、間違いを笑うという出来事を基に、同様の物事等も多面的、多角的に捉えることを通して、公正、公平、社会正義を実現するために大切なことに気付き、なりたい自分（たち）を価値と関連させ、更新してほしいと願う。

そこで本実践では、げんきくんの「いじり…」という発言を取り上げ、間違いを笑うということはいじりなのかいじめなのかを議論していく。その中で、間違いを笑うことが生じた際、いじりかいじめかだけではなく、「いじりが行き過ぎる」と超過（いじめ）になってしまうことや、他者への関心が不足すると関心をもたないことになることに気付き、最も相応しい中庸の考え方を見出すことで、いじめに関わる事象を多面的・多角的に捉えることができるようになり、集団の視点からなりたい自分を見つめ直す学びを生み出していく。

2 教材について

- (1) 本教材のねらいは、間違いを笑うことはいじりなのか、いじめなのかを話し合うを通して、公正、公平、社会正義を実現するために大切なバランスである中庸に気付き、道徳的な判断力を育むことである。

この時期の子どもは、誰に対しても分け隔てをしないで接することの大切さを理解できるようになるとされている。一方で、ギャングエイジ期の特徴として自分の仲間を優先することに終始して、自分と仲のよい相手を優遇し、自分と仲のよくない相手には不公平な態度で接してしまうことがある。これは不公平な態度が周囲に与える影響を集団の中の自分という視点で捉えることができていないことが原因になっていると考える。つまり、この不公平な態度をしている自分たちに気付くことができれば、複雑な要因が絡むいじめ問題解決の一つの糸口として、有効になってくると考える。だからこそ、いじりといじめの中庸がどこにあるのかを話し合うことで、間違いを笑うという出来事の中にある人間の弱さ（人間理解）や、間違いを笑うことがいじりなのかいじめなのかについての複数の考え方（他者理解）、仲がよくても公平に接し、本当の気持ちを考えて行動することの大切さ（価値理解）について、子どもの考えを表出させていくことで、他者の機微に触れ、曖昧さの中からいじめではなく、共生のヒントを見つけていってほしいと願う。

本実践では、本時で中心的な話題となる「いじりといじめ」について、げんき、みかの立場から考察を促すことで、デリケートな内容について配慮していく。また、前時には「よわむし太郎」（A 善悪の判断、自律、自由と責任）を学習しておくことで、善悪の判断と公正、公平、社会正義との内容項目間のつながりから価値との接点を見いだすことができるようになる。その上で本時では、事前読み後に書いた感想を共有し、げんきの「いじり」という発言を取り上げ、課題を設定していく。そして、間違いを笑うということは、「いじり」と「いじめ」のどちらなのかについて話し合うことで、社会正義とは自分が思う正しいことを押し通すのではなく、ふさわしい

立場や目的、対象、方法、時などを見極める必要があることに気付かせていく。さらに、なりたい自分たちという集団の視点で考えるよう促すことで、集団の中の自分についてメタ的な捉えを促進し、その中で自分はどんな自分になりたいのかを考えさせてることで、自己を見つめ直し、なりたい自分を公正、公平、社会正義との関連で更新してほしいと願う。

(2) 本実践に関する子どもの実態は次の通りである。(調査人数35人)

「自分はみんなに対して、公平に接していますか?」と尋ねた際、「はい」「どちらかというとはいはい」は30人、「いいえ」「どちらかというといいえ」は5人であった。肯定的回答の理由としては「公平に接していないと相手が傷つくから」「人に態度を変えたら差別だから」といったものがあり、これまでの経験から理解していることが伺える。逆に否定的回答の理由とは、「あまり人に声をかけたりできなかったから」「人の話を聞いていなくて行動が遅いから」といったものがあり、公平に接したいけどそれができない自分の状況がある子どももいた。

また「いじりとは何か知っていますか?」と尋ねると、およそ半分の子どもが「いいえ」と答えた。「いじりとは何かを知っている」と答える子どもの考え方を見てみると、「相手の嫌そうなことをすること」「いじめること」「煽ること」など、ぼんやりとではあるが、捉えていることがわかる。今回のアンケートの結果から、いじりについての捉えが曖昧ではあるが、それに似た状況は子どもの中にあることが伺える。

3 単元の目標

- (1) 間違いを笑うことはいじりなのか、いじめなのかについてその中庸について理解し、社会正義を実現するために大切なことが何かを話し合うことができる。
- (2) 自分と違う見方、感じ方、考え方方に立ち止まり、間違いを笑うことを多面的・多角的に捉え直すことができる。
- (3) 「いじりといじめ」から自分なりの価値との接点を見いだし、なりたい私たち、なりたい自分を見つめ直し、更新しようとしている。

4 指導計画（1時間取り扱い モジュール、道徳1時間）

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
事前	1 いじりといじめを読み、感想を書く。	<ul style="list-style-type: none">○ いじりといじめについて読み聞かせを行い、その都度聞き慣れない言葉や分からぬ言葉について確認し、内容を理解することができるようとする。○ 読んだ感想を教師と子ども、子どもと子どもで交流し、感じたことや考えたことを感想として書くように促す。 【モジュール】	<p>【主】「いじりといじめ」から自分なりの価値との接点を見いだし、なりたい私たち、なりたい自分を更新していく。(発言・ノート)</p> <p>【思】自分とは違う見方、感じ方、考え方を知り、物事を多面的・多角的に捉え直すことができる。(発言・ノート)</p>
1	2 いじりといじめの中庸について話し合い、その中で見いだしたこと基になりたい自分について考える。	<ul style="list-style-type: none">○ 課題設定後、間違いを笑うことはいじりなのか、いじめなのかについて考え、その中庸を話し合うことで、いじめといじりの間にあるグラデーションに気付くことができるようとする。○ 何がいじめなのかについて気付いたことを基に、どんな私たちになりたいのか集団の視点から今の自分を振り返ることができるようとする。(本時1/1) 【道徳】	<p>【知】間違いを笑うという出来事を基に社会正義について考えることができる。(発言・ノート)</p>

5 本時の学習

(1) 目標

間違いを笑うという出来事はいじりなのかいじめなのかについて話し合う活動を通して、中庸の考え方方に気付き、社会正義を実現するために必要な道徳的判断力を育む。

(2) 展開

時間	学習活動	子どもの思い・姿
5	1 事前読み後の感想を出し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ バラエティ番組で笑うことって、いじりじゃなくていじめだったのかな。 ○ だったら芸人さんはどうするの？ ○ だとしても、お母さんが言うように、嫌な気持ちになる人もいるのかもしれないね。 ○ 僕はいじめだと思わないんだけど。それもいじめだったら、今みんなはいじめたことがあることになるよ。
18	2 間違いを笑うこととはいじりになるのか、げんきくんとみかさんの考え方を基に書いたり話し合ったりする。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一人でも笑うようなことがあるんだったらいじりじゃなくていじめだと思う。だって、お母さんやみかさんと同じように嫌だと感じる人がいるんだから。 ○ う~ん、迷うけど、げんきくんが言うように、それもまさるくんが嫌がっていなければ、いじめじゃなくていじりだと思うんだけど。 ○ もしこれがいじりじゃなくていじめだったら、僕たちの身近でも同じような出来事が起こっているかもしれない。だからいじりだと思う。
15	3 話し合ったことを基に3—1はどんなクラスになりたいのかを話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 私たちのクラスだったら、友達の間違いを笑うことはそもそもないけど、それがいじめだという人が一人でもいたらそんなことがないクラスにしたい。 ○ でも、全く笑わないクラスというのもいいかどうかわからないから、みんなが嫌だと思わないことは分かっておきたい。 ○ うん、僕も同じでいい笑いはあってもいいと思う。でも、悪い笑いはないようにしたい。僕は人の気持ちを今までよりももっと考えることができるようになら。 ○ 私も同じ考えだけど、間違いを笑わないだけじゃなくて、自分の考えを話す時も、人によって態度を変えたりするんじゃないなくて、誰に対しても同じ態度で接することを考えられるようになりたい。
7	4 振り返りを書く。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 僕は自分ではいじりだと思っていたことをいじめだと考える人がいると分かって、もう一度自分がしていたことは大丈夫だったかと見直しました。これから、みんなが気持ちよく過ごせるクラスにしたいし、自分も嫌な笑いをしないようにしたい。 ○ 私はまだ、いじりといじめがわかりません。だから、これからも考え続けたいです。



本時では、間違いを笑うという出来事を取り上げ、げんきの「いじり」とみかの「いじめ」という考え方について、まさるやゆうきの心情を加味して話し合い、その中庸を練り上げていきます。その上で、私たちはどんなクラスになりたいのかと集団の一員としてのなりたい自分を更新する姿を生み出します。

主体的・対話的で深い学びを生み出す教師の支援（発問・指示・教具・評価）

- 「いじりといじめ」を事前読みさせた上で、初読後の感想を書かせておくことで、価値との接点を見いだすまでに時間を要する子どもが教材内容を把握できるようにしておく。
- 事前読み後の感想を子どもに尋ね、いじりといじめについて現時点での捉えを表出させていく中で「何かおかしい」「いじりなのかな?」といった“何か引っかかること”がある感じ方の多さに気付くことができるようになる。その上で、教材文のみかの発言「…本当に嫌じやなかつたのかな」を取り上げ、以下の課題を設定する。

【教材・教具】

- 大型テレビ
- 挿絵

“間違いを笑う”ことはいじり、それともいじめ？

- 課題について直感的に考えたことを表出させた上で、ペアやグループで話す前に今の自分の考えを書くよう促すことで、課題に対して自分なりの引っ掛かりを見つけたり、課題を課題と捉えていなかった子どもの立ち止まりを生み出したりする。
- 自分の考えを書けた子どもとなかなか言語化できない子どもを前に集め、自分の考えと違う考え方を見つけるよう聞く視点をもたせた上で交流するように促すことで、自分の考えを練り上げるスピードに応じて考える場をデザインしていく。
- 概ね自分の考えを書いたり、話し合ったりして言語化できた時点で全体の場をもち、げんきのいじりという捉えと、みかのいじめという捉えに対しての考えを出し合わせることで、板書を通してクラスの考えを知ることができるようになる。
- 話し合う様相から、すぐに結論を出している姿や話し合いが停滞している姿が見られた場合、その状態に応じて、現時点の考えに納得しているのかを問いかけたり、ゆうきやみかの立ち止まり、まさるの心情面から問い合わせたりすることで、自身の考えに立ち止まらせる。
- みかやげんきの立場が正義だと捉えて揺るがない場合、極端な事例を示したり、類似する場面を示したりすることで、思慮深く物事を見極めようとする構えを醸成し、“間違いを笑わないこと”について相応しい時や場面等を見極めることができるようになる。
- 全体の場での発言を聞いたり、ペアやグループ等での話し合いをしたりした中で、相手の真意が分からぬ場合、尋ねるよう促すことで、間違いを笑うことの多面的、多角的に捉えることができるようになる。
- 自分たちが見いだしたバランスを基に、3—1はどんな集団になりたいのかをこれまでの議論も踏まえて表出させることで、集団の視点から自分たちのクラスを捉えていくことができるようになる。
- 目指す集団像が子どもの言葉で語られた姿を見取った上で、振り返りを書く前になりたい自分に変化があった子どもはボード上のマグネットを操作するよう促すことで、これまでの自分を見つめ直すことができるようになり、振り返りを書くができるようになる。

【評価】

いじめといじりについて、これまでの学習と関連させて捉え、なりたい自分を更新することができる。（ノート・発言）